

25

143

佛蘭西國瑞
彪豪氏實傳
世界之燈

利宮 巍 校閱
嶺林太郎 編輯

東京

丁卯堂發兌

084764-000-0

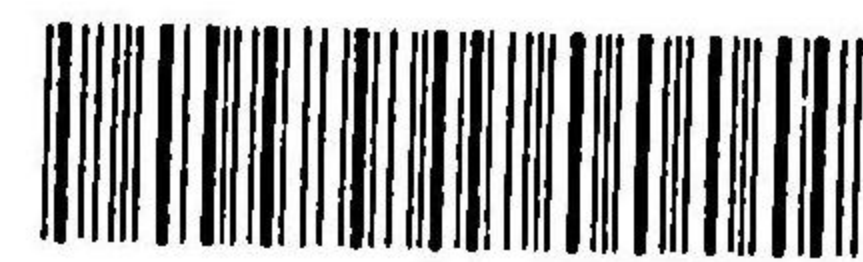
25-143

世界ノ燈

嶺林太郎／編

M18

DBA-0109



25

143

明治十八年十二月廿四日口務省贈付



16-143

頃目。余知人嶺竹陰携來一小冊子。乞校閱併徵
 序於余。繙卷一讀。則其名轟萬國其說動一世。所
 使人至稱非佛國之彪豪々々之佛國。詩賦小說
 大家彪豪先生之全傳也。先生一生之經歷細大
 舉無漏。叙事快活。健筆縱橫。真可謂近來之好譯
 書也矣。往年。余佛國留學之際。親接警咳知先生
 爲人。今也黃泉遠隔。不得再逢。悲夫。對此篇不堪
 於感慨。書一言以爲序。

明治乙酉初冬

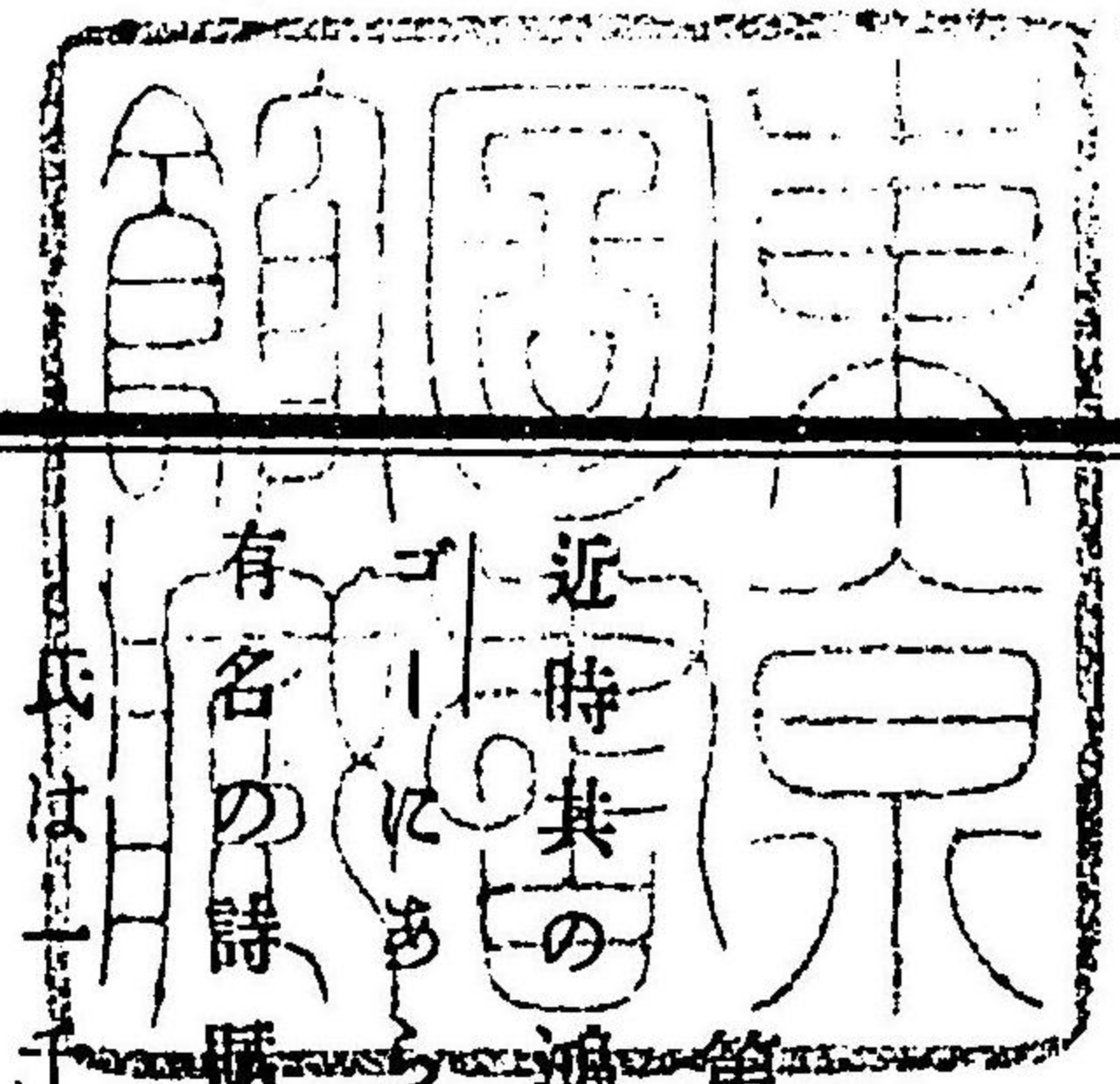
松南 新宮巍識

佛蘭西國瑞
彪豪氏實傳 世界の燈

新宮 巍 校閱

嶺林 太郎 編輯

第一回



近時其の瀟名を歐米兩大洲に轟かせ人をして佛蘭西のユ
ゴにあらすユゴ一の佛蘭西なりとまで稱道せしめざる
有名詩賦小説且つ政事家なる故ゲヰントルマリ、ユゴ
氏は一千八百二年即ち我が光格天皇の享和二年壬戌
二月十六日佛蘭西なるペンサコンの地に生る父は元とロ
ーレーン州に於て著名なる一貴族なるが當年那破翁第一
世の帝國の建創せらるゝや擢んで、其將官に用ひられ繼

二
ひで西班牙國某州の知事とはなれり故にユゴ―氏は其幼
けなきころ常に阿母の懷に抱かれ父が戰陣行旅の間に従
かいて東に依り西に寄り殆んど定まりざる居處あらず遂
に伊太利に赴むきぬ氏が齡未だ七歳に達せざるに或ひハ
アルノ―、ザベル兩河の邊或ひハナブルス灣に瀕き諸處に
轉住し日に衣し風に飲する無限の辛酸艱苦を嘗め盡して
遂に西班牙に來り其の首都マドリツに卜居したり此の
折氏は早くも己に嶄然たる頭角を露はし敢へて尋常兒童
の夥伴となりて學校に出入するを欲せず日夜詩賦に是れ
耽り往々人を驚かすの警句を吟じ出せしは世俗に所謂梅
楨は嫩葉より芳バしきもの歟一千八百十二年即はち我が
文化九年壬申那破翁第一世が驚天動地の覇權漸やく衰る

へて歐洲大陸の局面頓に一變し來り西班牙に在るの佛蘭
西人は皆故國に歸らざるべからざるに及び氏も亦其の母
弟と共に歸國したり父は氏を陸軍學校に入れ己れが武職
を襲かしめんと企圖したれども氏が詩を以て命となすに
心を惱まし先づ強いて算術を學ばしむ氏ハ止むことを得
ず父の教へに従ひしかど餘暇あれば尙ほ密かに吟咏し一
日も之れを廢せず優に其の精神を慰養し居たり十四歳に
至りて有名の詩三篇を作り又た其翌一千八百十七年學校
の闘詩に出せしところの詩は先輩と壓倒するの傑作なり
しより教師等は之れを見て如何に俊秀の氏にもせよ未だ
其の乳臭を免かれざるや豈に能く斯くの如くならんや是
れ或ひは他人の手に成り去ものなるべしと却て大いに氏

と疑ひ爲めに特別の褒賞を受くること能はざりし程なり
き後一千八百十九年氏が十七歳の時より一千八百二十二
年氏が二十歳の時に至るの間に及三篇の傑作を出し遂に
ツウハルス大學校より第一等の賞譽を受け氏の詩名此に
始めて世に著はる

第二一回

當時佛蘭西の政事家にして兼ねて著作に有名あるチャ
テウブリアンド氏が普漏西駐劄の公使に任せられ將さに
伯林府に赴かんとするや偶まユゴー氏が聰敏活達の少年
なるを愛するの餘氏を薦めて其の公使館附屬の官吏たら
しめんとせしに氏と身未だ外交上の事務に熟せざるを以
て遂に之れを辭したりと云ふ一千八百二十一年即ち我

孝
天
皇

が仁孝天皇の文政四年辛巳氏が阿母病に罹り溘焉世に即
く氏感傷禁する能はず白雲万里の頂を望んては其の恩嶺
の高きと想ひ蒼波九重の底を窺ふては其徳海の深きを思
ひ數週間殆んど寢食を廢するに至れり亦以て氏が平生情
感力に富めるの一證となすべし未だ幾はくならず氏の父
氏の徒らふ風月を嘯傲して毫も實業實務に従事するの志
さしあらざると憤はり若し斯の如くにして改悛するの状
なくんば向後復た爲めに資財を給せずと迫りたるも氏が
磊落不羈の天性固より區々たる衣食の爲めに敢へて之れ
を枉げず斷然父の扶助を謝絶し此に其の獨立の生計を圖
りつゝ已れが硯田筆耕の収獲たる僅々八百法の金に糊口
し千艱万苦の悲境に沈みぬ然るに氏は亦た是れ春を尋ぬ

るの才子賦を作るの恨人なればいつしか或る富豪の娘子
マデモワーセル、フーセルが絶世の姿容穠纖度に合ひ修短
中を得薄施淡掃も亦た嬌嬈蘊藉且つ才慧なるを一見せし
より芳州念に繫り香艸思を繋りて寤寐之色を忘るゝ能は
ず多少の花月新聞を經過せし後氏が會つて世に公けにし
たる黄絹幼婦の白づから才子佳人の良縁を媒ちし來れる
のみならず氏が知己なる彼の公使チャーターウブリアント
氏が又々間接に其の月下氷人となりフーセルが雙親に説
くに氏が他年爲す有るの雄才絶倫なるを以てしたれば富
豪の家も遂に意を決し貧窶洗ふが如き氏として其の娘子
の婿たるを許し吉を涓んで華燭の大禮を舉行したり此時
に常り氏が情願漸く達し秦晋相諧ひ琴瑟共に和する歡天

喜地の状は果して如何ぞや蓋し氏が得意生花の筆を揮も
亦未だ其一斑を描き出す能はざるならん

第三回

却つて説く氏は常に其の大有爲の才と抱くと雖も猶ほ
未だ風雲に際會せざるを以つて姑らく此の功名に念を絶
ち閑窓獨座日夜著作にのみ従事し居たるが程をく其の有
名なる「ハンス、オフ、アイスランド」と題する一書を作り之れ
を書肆に沽却して一千法の金を得るのミならず囊ぎに
一千八百二十二年氏が齡甫めて二十歳の時出版せし「オー
ヴン、エンド、パシット」と云へる書を再版し非常の潤益あり
しより氏の始めて桑樞牛衣の貧境界を脱出し來り復た衣
食に欠乏せざ後ち一千八百二十六年氏の又た其の第二編

を著はしより氏は是れより従前慣手の古休の詩句に精神を勞せずして専はら現社會の世態人情を諷しよる小説體の長篇鉅作を續々出版するに隨ひ既に都鄙に藉々たる名聲の益々廣く歐洲大陸に喧傳するに至る一日氏は一罪囚の死刑を宣告せられ刀光一閃の下三寸呼吸絶えて萬事忽ち休するを目撃し惻隱の情禁ずる能はず深く死刑の厭惡すべきとを感悟せし折柄猶重ねて獄吏が其の恐るべき斷頭機上に脂を塗り將さに明朝を期して幾多の性命を奪了せんとするを瞥見し慘然として悲しみ愴然として愛ひ家に歸るや直ちに管と擲りて「死囚の最後」と題する一篇と起帥し僅々三週間を経て全く其稿を脱し一千八百二十九年即はち我が文政十二年己丑の春之れと出版せり該篇の絶

妙なる罪囚死刑の慘狀を詳叙し恰かも鮮血の迸射して眼前に淋漓たるが如く腥風颯然紙上に生じ讀者をして爲めに急涙に嗚咽せしむ蓋し世間死刑の非を極論せし書冊に乏しからずと雖ども該篇の最も剴切悲哀能く人を感動するの右に出づるものなしと云ふ爾來氏が詩句の力に依り冤者の死を救護したる話頭は一にして足らず遂に上國王より下人民に至るまで氏を敬仰尊重せざるものなきに及びり氏は亦深く心を劇場の院本に注ぎ其の著作の人口に膾炙せる者夥しく新著一たび其稿を脱したるの報あるや巴里府内各劇場の座主等は互ひに之れを己れの劇場に演じ都人士の喝采を博せんと争ふの餘り或ひは爲めに紛議を惹き起し法術を煩はすものありしとは盛なりと云ひ

つべし

第四回

既にして一千八百四十三年即ち我が天保十四年癸卯氏の周ねく大陸を歴遊し其の滿藝の好材料を収拾し來らんと欲し飄然筆を載せて巴里の都門を出でたりしが偶々愛女の溺死せし凶訃を聞き空しく西班牙より歸國したり一千八百四十五年即ち我が弘化二年乙巳氏は其名聲の一世に高きが爲め佛蘭西王ルイ、フヰリップの厚遇を得擢んで、元老院議官に任ぜらる元來氏の始め詩家を以て稱せらるゝと雖ども夙に參政の大志を抱きたることなれば此の元老院議官の如き最も氏の満足を來たすべきの地位なるに氏が威望の赫々たるに至りしは此れにあらず彼れに

十

あり彼の一千八百四十八年即ち我が嘉永元年戊申佛蘭西に生せし革命の時なりとす當時氏の那破翁第三世及び其他の諸大家と共に巴里府より國會に送られ頼に從前の詞人詩客たる面目を轉換して英邁卓越の政論家中第一指を屈せらるゝに及しかを氏の尙ほ勤王保守の説を唱へ右黨の列に加はり居りぬ然るに氏が後再びセイーン州より撰舉せられ立法議會に出づるや竊かに社會の大勢に見るところあり決然全く前日の持論を捨て、敢へて左黨に入り議論風生其の急進の主義を擴張して復た心力を餘さず未だ幾はくならきして共和黨中に雄辨家の領袖を以つて推さる氏が懸河の雄辨を揮ひ大いに公衆を感動せしめしは教育の方法、撰舉法の改革、新聞條例、普通撰舉法の制限、憲法

の改正等其の他國家の大問題に關したる議論にして就中
政敵モンタレムベルー氏と三年間講臺に爭論したる加持
力宗教に係る問題の如きは永く佛蘭西人民の頭腦に記念
する者と謂ふべし而して那破翁第三世が巧に輿望を博し
天下を籠絡して遂に大統領に擢舉せらるゝや氏が炬の如
き眼光早く已に那破翁が國家を私しせんとするの陰謀あ
るを照破して着々其の假面を剥ぎ去らんと公衆の見聞す
るところ國會場裏新聞紙上の勿論苟くも會合群集の中に
至らば路傍と雖ども亦た敢へて忌憚することなく最とも
激烈なる論鋒を大統領の頂門に向け乃はち口を極めて有
名無實なる共和政治を排撃したるが故世人或ひは氏が苦
衷を察せ老敵黨は又た之れを奇貨とし氏を譏毀するに反

側子を以てしたりとかや

第五回

一千八百五十三年即はち我が嘉永六年癸丑彼の那破翁第
三世が其の平生の陰謀を成就し忽然共和政治を一變して
大統領より遂に佛蘭西皇帝の位に上るや氏が先見の明會
つて頻りに之れを排撃し來り反側子とまで譏毀されたる
愛國愛世の精神に始めて天下公衆に貫徹し氏を譏毀せし
人をして殆んど將さよ愧死せしめんとしたり當時氏に那
破翁が即位を拒絶する爲めよは之れを干戈よ訴ふべしと
主張せし一人よして又た國會の依託を受け護國兵の幫助
を得んと奔走周旋せし事あり一日氏が市街を通行の際人
民の黨々周圍に群集して其の方向如何んを問ひたるよ氏

は奮然敢て忌を憚るところなく大聲疾呼して曰ふやう今日
 の計を爲すは徒らに國家を竊む者即ち那破翁に背く
 べしと抑も那破翁は一世の奸雄能く佛蘭西人民を籠絡し
 威勢赫々たるの時なれば或る人民が斯る激烈の語を吐く
 を聞き氏が爲めに其罪の忽まち至らんことを憂ひて傍よ
 り衣を牽き君請ふ少しく聲を低うせよ若し或ひは敵黨の
 耳に入らば君が性命は即時銃口一發の烟に化すべしと云
 ひしが氏は慨然答へて善しく余死せば汝は余が鮮血淋
 漓たる屍を擔ぎて巴里府内を巡行せよ而て余が皇天上帝
 より背かざるの微忠を表示すべしと云へりと氏は是より壯
 士を募り那破翁が爪牙たる兵隊を襲撃せんと試みしが故
 あつて中ごろ之れを止め或ひは其の大手筆を揮ひて字々

稜を起し言々血を見る悲憤慷慨の檄文を草し那破翁と刻
 告するに反逆の大罪人にして國家の憲法を破毀せし者な
 るを以てせり續いて又敵抗委員の檄文を稿し公然之れを
 印刷に附する等氏が其國家の犠牲たるを自任するの熱心
 は洵に此の如くなるにも拘へらる人多くして天に勝つ佛
 蘭西の危運を如何ともする能はず那破翁の傲然帝位を占
 め得て權力復た當るべからず随つて氏は最とも忌み憚か
 られ其の國境外に驅逐せらるべき姓名簿中氏實に第一筆
 に記され居しと云ふ然れば氏は一時止むを得ず郷國を去
 つて伯耳義に走り首府テラツセルに寓しつゝ其の滿腔の
 憤慨を一筆墨に訴へ新たよ小那破翁記を著はし以つて
 那破翁第三世を譏刺したるも那破翁は頗る猜忌深き性質

にして我れ又反對の黨派の郵便等の必らず吏員を以て一々之れを開封せしめ調査検閲するを常とせしより小那破翁記己に其の稿を脱するも之れを巴里に送達するの道なかりしに氏に密かに一つの奇計を案じ出せり其頃伯耳義より巴里へ輸入し居たる雜貨中那破翁第三世の肖像を摸したる泥偶あり那破翁之れを聞き偕ては早や我が威名の隣國人民を信服せしむるに至たりしかと頗る喜悅の休なりしが一日其の伯耳義巴里間の鉄道線路に於て瀛車相衝突せし變事あり車中の貨物の皆細粉微塵となつて飛散せしゆゑ警吏の出張して之れを點檢するに當り焉んぞ料らん彼的那破翁の泥偶中より氏が痛く那破翁を譏刺せし小那破翁記の現はれ出んとは

第六回

斯く泥偶中より小那破翁記出で來り氏が奇計を廻らし居たるとの忽ち正に露顯せしかば那破翁第三世大いに激怒し屢々伯耳義政府を脅迫したるより氏亦た遂に同政府の驅逐せるところとなり單身孤劍飄然再び去つて英吉利に赴むきぬ其の伯耳義の同志と袂を分つの際自由を熱愛すると云へる題を掲げて氏が爲したる一場の演説は旨趣維渾理義博大廣く歐洲大陸に相傳へて一世の耳目を聳動したりとかや氏倫敦に在留すること僅々五日移つて英盆中間なるシニルセル嶋に渡航し該嶋に卜居せしが多年國事に盡瘁せしを以つて財罄き産破れ貧困昔しの如く妻の飢に泣き兒は寒よ叫ぶの一窮鬼となりしは實に憐れむべき

~~Legende de l'écrit~~
* Les Châtiments

の情況にして氏ハ漸やく其所有の器皿を沽却しマリテ
ルラス街に一箇年一千五百法の破屋を借り受けつゝ家族
九人の口に糊をるが爲め晝夜筆硯の餘暇なく収むる所
の賣文錢僅かに一家の餘生を送るを得たり然るに伯耳義
の書肆の如き概ね皆な狡猾無情にして曾つて氏が著作の
稿を請ひ之れを刊行發賣したるも或ひは全く約に背き
て毫も利潤を分たざりしは惡むべきの極と云ふべく彼の
有名なる「レジャーマント」と題せし一篇の如きは氏が畢
生の技倆を逞うしたる一大著述なりと雖ども其刊行發賣
の収利は凡そ十八年間全く外國出版者の措手に歸したり
と云ふ且つ説く佛蘭西皇帝那破翁第三世が氏を忌み嫌ふ
こと尙ほ前日に異ならず執念くも復た英吉利政府に照會

Guernsey

するところありしに因り氏は重ねて「シェルセル」嶋を立ち
退かざるべからざるの厄に遇ひ一千八百五十五年即ち
我が安政二年乙卯十一月二日快々然更に行李を整理して
「シッパン」嶋に移住したり元來該島は其の人民皆な佛蘭西
語を用ふるも佛國の版圖外なるを以つて那破翁第三世が
凶焰毒氣の及ぶべき處にあらず是の故に氏は始めて少し
く心襟を安んずるを得山復た山河の工か青巖の形を削り
成す水復た水誰が家の碧潭の色を染め出す満島の風景に
逍遙し花に吟じ月に詠じて自由の精神を養ひしにぞ氏が
天分の詩才は益すゝ鍛練して一篇の此の一孤嶋を出る
毎に普く歐洲大陸の人口に膾炙するに至れり氏は居常諸
兒の教育と貧民救恤の事業を怠らず且つ敢へて片時も眼

を社會變遷の局目に注かざることなく凡そ歐米兩洲に於て人民の利害休戚に關すべき大議論の紛起するに會すれば氏は毎に遠く書翰雜誌若くは建言書等を寄贈して其の自己の意見如何を吐露するを例としたりき斯くて一千八百五十九年則はち我が安政六年己未に至りて佛國政府始めて大赦の命を下し氏等國境外に驅逐せられしもの皆な國に歸ることを赦されたれど氏は獨り大に之れを賤しみ其恩命を受くるを屑しとせず遂に一書を本國皇帝に寄せて其の意見を示すに當り敢へて佛帝を指しボナパルト氏とのみ稱せり聞く者孰れも氏が強項不屈の精神を驚嘆せざるはなかりしとぞ

第七回

氏が各處に流寓飄泊するや滿腔の感慨は偏へに氏をして著作の材料に乏しからざらしめ其の稿を脱するもの甚はゞ夥だしく就中艱難篇と題し自己の境遇を叙したる一書の如きは最も世人の欣讚するものにして氏亦之れを刊行發賣したるが爲め多少の潤益あり少しく其の生計を補ひしと云へり後伯耳義の首府ブラッセルの出板者等は聊か其良心に愧ぶるところありてや遂に相議して氏を招待饗應するの一大盛宴を張りしが此席に列する賓客は皆屈指の名流ルイ、フランコウベルタン等を首め各國の新聞記者なり然るに人々いづれも氏を尊重せざるはなく渾く其の禮意を表したるに因り伯耳義人民の信用は頓に増加したるのみならず彼那破翁帝黨の如ものと雖も佛蘭西

人にして此の如きの名譽を有するは實に我國家の光榮なりと評するに至れりとかや却つて説く那破翁第三世は一時の權謀術數を以つて巧みに公衆を籠絡し全國の承諾を得て佛蘭西皇帝の金冠を戴きし以來其勢焰愈々熾んに死んぞ歐洲大陸の覇主たるが如くなりしも國內の自由政體を恢復せんと謀るもの亦た反つて日一日より多きを加へ百方之れを制遏するも到底些の効を見ざるに至りしかば那破翁は更に佛蘭西人民が平生の功名心を利用し己が戦勝者たるの光榮を博取して以て一家の富貴榮華を永遠に維持せんものと一千八百七十年即ち我が明治三年庚午の七月西班牙國王位繼承の事よりして其の利害の關するところ佛蘭西人民が頗ぶる激動するの勢ひあるに乗し那

破翁は蕤然驚天動地の一大戦争を起し國家を孤注として以つて勝敗を一舉に決せんと普漏西王維廉が一步を譲りて彼の王位繼承の事には與からざるべしと宣言せしをも顧みず直に戦書を普漏西王の許に送り齟齬たる妖雲殺氣は忽まち歐洲大陸を蔽ひ日月光無く艸木血を吹くの慘劇を演出するに至りぬ當時氏之深く那破翁が姦黠暴戾の舉動を惡みて之れを無名の一私闘と看做し敢へて普漏西を敵視するの念慮なく其の客留せるソルン島の婦女子を獎勵し許多の綳帶綿織絲等を製せしめて以て之れを普佛兩軍の負傷者に贈與せしむる慈善の事務を自任し滿目の風雲は氏をして筆を投じ戎軒と事とするの意氣を發せしめず宛然として其の感動力なきものゝ如くなりき

既にしてセマンの一戦佛軍大いに敗走し昨日までの其の
覇權の内外も嚇々たりし那破翁第三世が脆くも劍を脱し
て降虜となり普軍長驅巴里へ早く既も重圍の中も陥りよ
るが其の年九月四日彼の有名なるカンベッタ氏等が新た
に共和政府を立つるとの報を得て氏も驚喜の餘り覺えず
揚言じて曰へるやう咄々自由の既に我が佛國に復歸せし
ぞや余も亦急も歸途に就かざるを得ずと決然ク非ルンの
孤島を出で、伯耳義に渡航し程もなく氏を停車場まで送
り來り離別の涙もくる、諸親友と袂と分ち其の車室へ入
るや否や瀟笛一聲忽ち氏が其の十有二年間夢寐相忘れざ
る故國の山河に向ひつゝ、箭を射る如く駛走したるも之れ

を氏が歸心の急あるに比すれば或ひは其の遲緩を覺ゆる
ものあるべきなり斯くて氏を載するの列車の隣々として
佛國の境界なるランドルジール府の近傍に達するの際只ど
見る其の頭髮の蓬々として砂塵を被ぶり顔色憔悴恰も冤
鬼の如く風聲鶴唳に膽落ち魂褫はれて隊伍を亂したる青
衣紅裳の兵卒等が辛うじて三色の國旗を擔ひ此方を指し
て右往左往に潰へ來るを氏の一とさび之れを目撃するや
其の愛國の誠心衷情より迷落するところの行々の熱涙の
驟雨の如く起つて其の頭を窓外に出し凜然たる聲を發し
叫びて曰ふ佛蘭西よ本國よ我が兵士よ落膽する勿れ決
して落膽すべからずと兵卒等は誰れもつて之れを耳にも
かけ定ひた走りにはしり去るにぞ氏の扼腕頓足し大聲疾

呼すること狂の如く其の氣力を挽回せんと百方之れを勵ましければ果てハ兵卒等も之れを怪しみ誰れなるかと三々五々列車の方に向ひ来るを見氏は再び之れを慰めて嗚呼兵士よ汝の過ちに非らず汝ハ既に國家を盡すべきの義務を全うせしぞと語未だ訖らざるに無情の瀟力ハ兵と兵卒とを離隔し一瞬間林遮ざり岡蔽ひ互に其の影を見失なふに至りしも氏ハ猶滿胸の悲憤を遣るに由なく頭を垂れて流涕大息し居たりけるが忽ち復た傍人を顧りみ嗚呼若し佛蘭西の削奪せられて再び路易十三世の時の如きに至らば余は實に之を見るに忍びざるありと語れり

第九回

氏ハ曾つて歐洲未來の社會をして一大合衆國たらしめ之

れと名づけて歐羅巴合衆國と呼ばんことと期望せしことあり然れば今我が墳墓の地たる佛蘭西の禍を轉じて福ひと爲し忽ち共和政府を設立するに至たりしとの報を得たるより取るものも取り敢へず歸程を上りしが彼の兵卒等が憐れ果敢なくも散々打ち負けて我を先きに引き退くの景況を見るにつけてハ氏が其の嗚々地を落ち胎髪未だ燥かざるの時よりして我佛蘭西の武運ハ天下を敵なしと此の年六十有八の高齡まで深く信認誇詫し居たりし心の今ハ早や我れ亦がら慚愧に堪はず天を仰いで空しく慷慨流涕長大息するのみ斯くてハ果てじと自うら精神を勵まし急ぎ巴里を馳せ着きてカンベッタ氏等と共に新たに設立せし共和政府の事務に就き且つ書を裁して普軍に

送り切に講和の事を勧められども遂に其の効を見ず氏も亦百万重圍の中に陥り爾來一百餘日間彈丸雨注の下に在つて従容自若平生の著作に従事し居たりと云ふ是れより先きガンベツタ氏の如何にもして地方の援軍を召募し今一と度此の孤城の危急を救はんものと城中より一箇の輕氣球に打ち乗り凜々霜を降すの冬天に飛騰せしが普軍之れを仰ぎ見て亦た其の輕氣球を出しガンベツタ氏と空際に相戦ふ是と以てガンベツタ氏に初め地方に達する能はず空しく城中に回れり後復た再三試みて漸やく効を奏し稻麻竹葦の如く群集充滿せし普軍と眼下に見えろしなから一瞬千里遙かにハーアンと云へる處に着し端もなくツール府に進行して數月の間重圍外の諸州に號令し奮闘

決戦劍折れ彈盡るも亦誓つて敵に降るの國辱を取るべからざる旨を宣告し畢生の心力を注ぎて士氣を鼓舞し居たれども奈何にせん虞淵の日招くべきの戈なくガンベツタ氏が援軍の目的を達せざる前佛蘭西の命運全く盡きて巴里は早く既に糧絶え策窮り翌年一月に至り共和政府の已むを得ず垢を含み涙を呑みつゝ遂に城下の盟をなし鉅万の償金とアルサス、ローレーンの二州と割きて之れを普漏西に與へ戦休み圍解けゝるにぞ氏の人々と漸やく城中を出しとる此の一大敗衄の餘佛蘭西人の皆な氣沮み膽奪とれ死灰殆んど將さに再燃せざらんとするの慘狀を見て氏は悲愴憤慨自から禁ざる能はず起つて節を撃ち壯快活潑なる詩賦を朗吟し來つて全國の壯士等と鼓舞振作する

や其聲恰りも金石より迸發するが如く一とたび之れを聞
くものゝ意氣勃々踴躍相和して其の佛蘭西人が固有の精
神を恢復するに至れるハ實に氏ガ吟咏の力なりと云へり
而して後ポルドゥに立法會議を開くに當り己に記せし如
く氏ハセイ州より撰舉せられ總計三十二万八千九百七
十枚の投票中二十一万四千六百六十九の票數を得て優に議
員たるの地位を占めたり然るに其の議論の右黨議員諸氏
と合はざりしより書を議長クレウ井一氏に出し三ヶ年以
前よりハカルバルザ一氏の論用ひられず今日は又た余ガ説
容れられず余ハ唯だ職と辭せんものと報じて直ちに退職
することゝなりしに偶然其の愛兒の病死せしを以て其の
遺骸を護し巴里に歸り來りし折しも忽然として復た彼の

有名なる共產黨の一大騒亂の都城に勃發し來れり

第十回

初め普佛の和成つて巴里圍解くるに當りてや方に謂ふ此
れより以つて兵を息め民を安んじ疆を畫して自から守り
後と善くするの計を爲すべしと而して意はざりき外難甫
めて平らぎ内患忽ち作り**共產黨**の起る蜂屯蟻聚の如く
ならんとの抑も此共產黨ハ都城内外の兵士と人民等が合
同聯結せしものにして其始めて亂端を發せしものハ即ち
ち人民なり之れが目的希望とするところを尋ねれば曰ふ
人々各自相統轄し賦税ハ則ち自から徴するに由り徭役
ハ則ち自から供するに由り兵勇ハ則ち自から出づる
に由り一切の事苟しくも在上政府として之れを鈴制する

こと勿らしむ猶ほ之れを約言すれば自から耕やし自から
 守り各々相安んじて相擾ることなく以て天誦の自由と全
 うし獨立を行ふに在りと進んで大統領チエル氏に迫るチ
 エル氏毅然として可かず人民皆怒て遠近騒然たり然れ
 ども猶隱伏して未だ輒く發せざりしガチエル氏衆を集め
 其の暫らく他に行きて政府を置くの場處を議するに及び
 議論紛々一ならず或ひの宜しく巴里に在べしと謂ふ者あ
 り或ひと宜しくツールに在べしと謂ふ者あり或ひの宜し
 くポルドウに在るべしと謂者あり或ひは宜しくリナンに
 在るべしと謂ふ者あり獨りチエル氏以爲らく巴里の現に
 居るべからずツールは殘毀荒廢の餘凡百未だ備はらずポ
 ルドウリナンは共に規模狹隘なりウエルセールの地の最

とも便たるに如かざるなりと意を決して衆議を排斥し遂
 にウエルセールに遷れり蓋し其の時早く既に共產黨の亂
 芽を萌し蔓延甚はだ廣く都城の内外に盤踞し爪牙羽翼四
 周に布けるを以て倘し一とたび其の中に投せば是れ罪囚
 の牢獄に居るに異ならず其の手足を繫維せられ其の舉動
 を挾制せられ唯だ彼等が欲するところを任せざるべから
 ざるのみ故に決して一日も處るべからず今若しウエルセ
 ールに遷らば其の地近く巴里に接す假令變亂の生ずるあ
 るも兵を調へ陣を行る轉輸甚はだ易く撲滅難きに非ずと
 深謀遠慮乃ち急に其の策を出たるなり斯くて政府をウ
 エルセールに置くの後人民の激動愈々甚はぶしく首魁ベ
 ルナルドが臂を振ふて一呼するや否や驚然之れに應むる

者殆んど十餘万人各地方亦た木と斬り竿と掲げ蠢動として競ひ起らざるはなく一彈指頃亂既に成り其の政府の命を奉して誅討彈壓に向ひしところの兵士すら程なく叛いて人民に與みせしのみあらず婦人女子の如きも去年來久しく伏屍流血の修羅場中に生活し婀娜柔婉の氣を化して慄慄危激の質となり戰鬪馳驅を看て宛なから舞踏遊戲の思と做し居たる折柄なれば殺氣の爲めに捲き起され奮然起つて之れに従ひつゝ鳴鎗發砲の間筭に及ぶの殊字を待つ娘等東に走り西に奔り兵勢軍機を助けて以て或ひは糧を陣頭に輸ぶあり或ひは火を街上に放つあり其騷亂の猛烈なる實に名狀すべからず血肉雨の如く樓臺灰に歸し砲聲彈響の巴里に轟鳴するもの殆んど七晝七夜に連なり

しと云ふ當時氏は亦た咄嗟に惻隱の心を喚起すべき妙詩句と作り出し力めて該黨を諷動せしが爲め有繋に該黨も胸中深く感ずるところやありけん頗ぶる其の狂暴の勢焰と挫じかれ随がつて之れが悲惨の禍害を免かれし者極めて夥多なりしと

第十一回

亂定まるの後氏復たブラッセルに赴きしに其年五月伯耳義政府が共產黨に關する決議に就きて氏大いに之れを批難し敢て公然と該黨の逃亡者と誘引し以て己れが家も藏匿せんと謀りしとの忽まちは露顯及び同政府愕然急に氏を驅逐するの命を下せしにぞ氏が將さよブラッセルを去らんとするや敵黨來つて氏を圍む氏幸に警吏の救護す

るところとなりて纒ふ難を免かれ直ちに英京倫敦に赴
 むき淹留暫時遂に巴里に歸れり斯くて氏の名望ハ一世の
 泰斗を以て欽仰せられ其著はずところの妙篇鉅作實に枚
 舉するに遑あらず曾て「レ、オリヤンタール」に於て風色の美
 妙を詠じ「レ、フェイユ、ドートンヌ」に於て人間の清潔ある心
 情及び忠貞の志操を詠じ「レ、コンタンアラシヨ」に於て少
 年の思想快樂を詠じ「レ、シヤチマン」に於て其身を犠牲とし
 以つて共和主義と執れるもの、復讐を詠じ「レ、ポーブルシ
 ヤ」に於て自己の仁慈を詠じ「レ、トラウ、ハイユール、ドラメ
 ール」に於て自己の愛情を詠じ「レ、コクシチル」に於て自己の
 欣笑する心緒を詠じ「カードル、ウエントレース」に於て自己
 が戦陣に臨みし勇氣を詠じたる等いづれも人口に膾炙せ

Hernani

ざるとなく又た「レ、ミセラール」の思考リュイ、プラールの剛
 慢リュクレース、ボルジャの恐怖シヤル、ケンの哀情シリ
 ヤットの義勇等を叙したる諸傳と讀者をして覺す之れが
 爲め又其の心志を豁大高尚ならしむ或ひ之其の兄弟に食
 を與ふる「ガブローシユ」の説話或ひは彈丸雨注の前に談笑
 せる「プチット、ヂヤンヌ」の傳記の如きに至りてハ筆々眞に
 迫り心動き肉顫ふの感を起さざるものなかりき就中氏が
 一千八百二十九年即ち我が文政十二年己丑の著に係る
 演劇の院本「ヘルナニ」は未曾有の喝采を博し之れを劇場
 に演ずるの度數既に一百回以上にかよびしるば都城の人
 民之れを祝賀するの意を表せんと一千八百八十一年即ち
 我明治十四年辛巳の二月を卜し氏を招待して一大盛宴

を開きたるが時尙ほ春寒雪を催し料峭として肌粟を生ずるの天なるにも拘はらずエイロー街の肩摩毆擊宛ながら人海人山をなし歡呼雷の如く花環雨に似たり氏の朝未明より堂上に立ち内外數万の賀客と應對するの容貌藹々然として和氣拘すべく見受けられぬ嗚呼是れ氏が名譽の大祭にして實は佛蘭西國不朽の佳話以て千秋の後に流傳するに足るものあるなり

第十二回

氏は又た英國の學士文人等が義舉を賛げ彼の俠名の五洲に雷轟したる露國虛無黨の領袖と仰がれ後ち更に佛蘭西政府黨の巨魁と爲りしペートルシラポキン侯等の罪を赦されんことと大統領グレウ井―氏は請願せしことあり初

1842-
クハト
ハ

めシラポキン侯が其夫人と共に露國政府の爲めに流竄せられたるシベリヤ地方と脱がれ佛國リヤン府に來れるや同府の兼ねて無政府黨の叢窟なると以て侯は暫らく此に滯寓し其黨中の矯々たる人々と相交り大いに黨衆を募り得て密かに逞うする處をらんを欲したるに黨中の最も過激なる少年壯士輩の爲めに却つて大事を誤まれ即ち其少年壯士輩は一夕或る劇場の雜沓に乗せて觀客群集の中に爆烈彈を投じ以つて都人士等が驕奢遊佚の間に醉生夢死せし心魂を打破し來らんとしたる變ありて侯は忽ち其の黨五十二人と齊しく警官の捕縛する所となり入獄の後一千八百八十三年即ち我が明治十六年の一月八日よりリヤン裁判所の糺彈審問を受け同十九日に至りて各

相立得か
の考加

々判決宣告せられたる中に侯の禁錮五年罰金二千法監視
十年の嚴科に處せらる抑も侯の露國の勳閥家に生れ出で
夙に世に立ち能く文武を兼修し其人に接するや風神高尙
和氣眉宇に溢れ自から興望を収拾するに足るの人物なる
が故若し侯をして立憲政体の國に在らしめば天晴れ出將
入相の英雄豪傑たるも露國の如き政の上に專ばらにして
民の下に苦しみ公道顯はれず眞理明かならざるの危邦亂
邦なれば侯の遂に其の技倆大能力を伸すの機なく徒ら
に乾坤不遇の人となす。且つ屢々刑罰を被りしのみならず
客土に龍鐘して今復た斯る判決宣告を受けたることの程
なく歐米兩大陸に傳はるや人々皆之れを憐み殊に英國の
學士文人等の連署して書を大統領グレウヰー氏に贈り侯

侯が罪を赦さんことを請願するも決したるが猶ほ其の請
願の意と強くせん爲め所謂佛蘭西のユゴーも非ずしてユ
ゴーの佛蘭西なりとまで欣慕尊敬さるゝ氏の連署を乞ふ
ことゝなりたり然るも其の請願書の紙面の連署の姓名の
業に已に充塞し氏の姓名を記入すべき上位も空處を存せ
ず固より氏の如き有名の大家も對しては其の下位も署名
を乞ふべからざるより且つ憚り且つ惑ひ居たるも請願委
員の勢ひ最早已むを得ず不敬を顧みずして氏も面し其の
實情を吐いて敢へて署名を乞ひしと氏も容易く之れを諒
し随つて其の義舉を賛して直ち紙葉を繰へし他人の署
名なき餘白の頂上に筆を把つて墨汁淋漓書して曰ふ凡そ
人の其の寛厚の情を以つて他の罪を赦すのことへ余が平

生大いに希望するところなり特に今彼のペートル、シラボ
 キン侯の爲めに罪を赦さんことを請願するが如きの義舉
 の余が中心深く賛美するところなりゲ井クトル、ユゴ―手
 記す」と氏が此の一語の大統領クレウ井―氏をして赦罪の
 請願の妄りに拒絶し難きと思慮せしめ頗ぶる其の胸襟を
 惱まざしめしと云ふ

第十三回

尙ほ説く氏が其家に在るや常にシヨルシユ、シヤンヌと呼
 べる兩個の慈孫をして左右に侍せしむるの天福を有せり
 氏ハ此の稚兒の爲めに老と忘るゝものゝ如く朝夕窓下に
 相戯ふれ時あつてハ稚兒か合同して楓様可憐の手を開帳
 し祖翁を抱擁せんと其の不意に乘じ驀然急追し來るを氏

ハ漸やく脱して遠く門外に遁逃するの狀ハ宛ながら敗將
 の猛卒に邂逅したるが如く氣息喘々流汗背に洩ぬし是れ
 巴里一都人の熟知するところなりと云ふ亦た以て氏が慈
 孫に慈あるの情趣と窺ふに足る此の嬰孺たる老翁と此の
 好愛なる稚兒とが笑遊嬉戯に餘念なきの景況は如何なる
 畫工にして能く寫し出すべき乎假令ひ能く寫し出して眞
 ん迫るあるも恐くハ稚兒が其の纒かよ語を解するの舌を
 以つて阿祖々々と呼び老翁の之れに應じて歡話する一種
 鐘情の態度を描き盡すこと能はざるべし氏が稚兒を愛す
 るの心其れ斯の如く厚し故に其の怒れる時に當り稚兒の
 來りて少しく欣笑することあれば顔色忽ち霽れ其の哀
 しめる時に於けるも亦ち忽ち眉を開く氏曾つて慈孫に

語つて曰ふやう余が詩句は凡て汝が輩を愛するの他に
出でずと宜あるかな氏に此の世界万物中よ於いて屢々小兒
を愛するの心情と咏ぜしことや且つ茲に氏が風采の如何
んと記さんよ氏の顔色に其の精神氣力を表示し決して怠
容あることなく古人の肖像中に於て之に類似する面貌と
求むれば獨り彼ロビュールあるのみ數年前ダヒツリアン
シエロの人大理石と以つて氏の壽像を彫刻せしが之れに
鬚髯を附せずして唯だ思念するが如きの面貌を作れるよ
し此に決して氏の肖像と謂ふべき物にあらず氏が真相の
多髯にして人若し一見せば自づから畏愛の念を起すべき
神色を具へ最とも勇壯の状を含めるもの、如く曩時ハ氏
の顔色頗ぶる蒼白ありしも爾後變じて赭色と化せり蓋し

氏が再三郷國を逐はれ飄零流竄中久まゝく彈丸黒子の孤島
に起臥して日夜其の大洋風潮の爲めに薰染せられしに由
れるならん而して其の頬端ハ銀色の如き短白髯を以て邊
縁をちり其の不朽の名譽を証せし額ハ少しく前に秀出し
て光澤を帯び頭上の白髪ハ上指して森然銀針を倒裝する
が如く其の眼睛ハ青白にして時に怒れるが如く時に情を
含めるが如く時に才徳の光輝を發するが如く時に仁慈を
垂るゝ如く其の聲音ハ喉底より發するが如く極めて爽朗
なり氏ハ平生謙遜退讓敢へて人を凌がず之れに接せば一
團の和氣眞個に春を覺ゆ然れば其の徳望日一日より盛ん
よ或ひハ氏と目して國瑞とし或ひハ文化の父祖とす故に
氏の慮を過ぎて其の起居を候する者ハ皆必らず禮服を着

文不祥
瑞

するを例とするに至れり

第十四回

抑も佛蘭西にての古へより偉人烈士の名を移して之れを
新造の市街に冠し千載長く世の紀念とするを其慣例と
し來りしを以つて氏が名も亦た忽ち市街の名となり曾
て巴里府内にユゴ―街と稱するものあり今尙ほ存する
聞きぬ蓋し其生前より此の限りなき榮譽を享受せし
を推して嚆矢となすと云ふ斯く氏の名聲徳望の獨り泰西
に盛んなるのみならず遠く我が東洋にまで著るしくして
一千八百八十二年即ち我が明治十五年の冬舊自由黨總
理板垣退助君が歐洲觀光の遊を試みらるゝや亦た氏を訪
問せられしに氏の其の同心同感の朋の遠方より來りたる

を喜び之れを遇する殊に厚く他の坐客として驚異せしめ
ざるほゞなりしと既に其の初見握手の禮を了りしかば氏
は板垣君に對ひて曰ふ君の東洋に於て夙に自由の主義を
執り多年其の創業の千艱萬苦を経歴し又た近日歐黨の爲
めに刺殺されんとしたりしは余の業に己に傳聞知悉する
ところなり今や萬里航渡親しく余が廬を訪問さる余は實
に欣然に堪へざるなり然るに余は年老ひ氣衰ふ久しく談
笑の歡を同うする能はず因て聊か余が衷情を概括し君が
爲めに一言を呈すべし曰く進め進め退くと勿れと暫くし
て氏又自から其語を解釋して曰ふ君は意氣尙ほ壯烈余が
言ふところを以つて假令ひ大磐石に撞着するも亦必らず
急進突過すべしとの意なりと誤解するを休めよ若し或ひ

ハ大磐石の其の前に當るあるも苟くも我が進まんと欲するの精神にして倦怠せず間斷なくんバ大磐石は自然我が乗すべきの罅隙を生じ來らんと氏又た曰く余を以つて日本の現勢を察するに蓋し人民を觀感興起せしむべき歐米諸洲自由主義の政論稗史類と其國內の新聞紙上に續々掲載すると急務と思はるゝあり云々と是に於て平板垣君ハ親しく氏が著作中孰れが最もも携帶し歸るに宜しきやを問はれしに氏は答へて曰ふ余は此時世の感情と共に推移したるものなれば君若し余の著作を携帶し歸らんと欲せば其の撰擇するところあるべうらず今より十年以前の起稿に係るものは皆是なりと時に氏は齡己に八十有餘元來氏が常に社會の外に立て其の時世の感情の得失如何を

達觀し務めて弊害を矯正せんと試みたるが如きハ洵に其の一生の本領と云つべく或ひハ氏を呼んで時世の裁判官と謂ひしも固より偶然に出でしにあらざるなり却て説く氏は彼のガンベッタ氏と交情最も深く那破翁己に踐いて共和政府新たに起りし以來猶は益すゝ親密を加へガ
ンベッタ氏を愛撫すること骨肉管ならず是を以つてガンベッタ氏が滿腔の宿憤未だ露れざるに空しく悲命に斃れ九原未死の鬼雄となりしと哀痛哭慟すること最もも切に一千八百八十三年即ち我が明治十六年一月六日大統領グレウ井一氏以下官民男女凡そ二十五万人の巴里に相會してガンベッタ氏の國葬を送るや氏も亦た傲骨稜々滿頭雪を戴き其の愛孫の手を携へつゝ蹠跚杖を曳き來れり

氏と未だ公衆の奠薦を許さざる以前大統領の夫人等に續いて柩前に詣りしが悄然佇立頭と低れて萬行の涕淚早く既に其襟に滴り暫くのものも得云はず爲めに滿座の人々をして更に悲哀の感情を添へしめたりき嗚呼浮世は是れ夢幻の如し疾風の花を妬み陰雲月に譬す生者必滅の固より免かれざるの道理なりと雖も念ひざりし當時知友を哭するの氏にして其の星霜僅に二周復さ忽ち知友の爲めに哭せらるゝの人とあらんとは

第十五回

一帯の碧氷の甘餘橋に沿ふて流れ幾條の鐵路は十二街と通して走る朱輪華轂美人の車は馳せて流水の如く玉勒金鞍公子の馬は驕つて騰龍に似たり葡萄酒の美にして行客

皆な醺を帯び薔薇花の香しうして遊園偏に風に宜しく歌吹海を成し駟羅雲を作すさしも繁華の巴里府内も昨日の景色も引き換へて今日は忽ち悲涼寂寞たる情況を呈し彼の那破翁第一世が以太利塊地利の諸國に打ち勝つて其の威名を歐洲に轟かし俘獲山の如きの殊功偉勳を不朽に傳へんと始めて其の經營に着手し今を距る三十餘年前漸やく落成して人家萬竈鱗の如き間より突起し高さ二十五間二尺全府の形勝を領略せし宏壯美麗の凱旋門さへ何となく物凄しく愁ひと帯び恨みを鎖せし心地せらるゝの抑も如何なる故ぞ氏が送葬の當日なればなり嗚呼生涯の憑み少なし水上の浮萍浪に随つて散じ體貌の保ち難し樹頭の落花風を受けて飄へる氏も亦た遂に隔世の人となり

ぬ而して氏が死去の固より天折にあらずと雖ども誰れか復た斯の如き偉人大家の永訣を哭せざるものあらんや氏の其の死去されし日より九日の後則はち本年六月一日を以て古來英雄豪傑の士の墓地たるパンセオンの堂宇中に葬らる右葬式の佛蘭西にて實に空前絶後とも評すべく二年前ガンベッタ氏の葬式に來會せしもの二十五万人當時云ひ傳へ以て佛國の一美談と爲せしも猶ほ未だ氏が葬式の盛んなるに及ばず氏が葬式に來會せしに殆んど一百万人に達したりと云ふ當日の前夜より降りしきる大雨の少しく晴れ間あるを幸ひ此の盛んなる葬式を見バやとパンセオンの墓地に到るまでの沿道の市街の朝未明より幾百千の老若男女我れ先きに馳せ集り人山人海寸地を餘さず

各旅店の如きも亦皆な兩三日前より會葬者を以つて填塞し遠方より後れて來れるもの宿すべきの旅店なく空しく戶外に夜を明のせしものもありしとかや其の葬式を行ふの場所の即はち凱旋門にして近傍空地の政府の貴顯外國外交官元老代議兩院の議員及び各地方の總代人等隙間もなく列を正し頓がて葬式に取り掛りけをバ代議院議長フロケ―氏先づ一場の弔詞を述べたるに群集の人々のいづれも肅然として耳を傾むけ益すゝ其の悽惋の情を催はしより既にして凱旋門を出棺せし正午十二時と覺しく棺前より花冠を稱載せし車十二輛の轆々と進み行き此の他垂れ下げし旗及び飾花と携へ棺後に從ふもの八百人其の次の會葬の人々にて又さ行列の間には警官兵士の嚴

重に警固するあり斯る大葬も隊伍整々敢へて散亂雜沓の
 患もひもなく頓がて其の墓地パンセオンに到着して首尾
 能く其の埋葬を了れりと云ふ

第十六回

是れより先き氏が濫焉即世の報の聞ゆるや巴里府内共
 産黨等の急に密秘會議を開き我黨の氏が葬を送るに際し
 て巨大なる紅旗を繰へすべしと決定したることの早くも
 政府に知れしより政府の大ひに驚ろき直ち之れを禁ず
 るの令を發したり此の蓋し曩きに同黨が自黨の威勢を表
 示せんと佛蘭西の國旗に非ざる紅色の旗標を押し立て行
 列運動を試み其の途上警官の制止するところとなりて遂
 に一場の紛議を生ぜしことありしが故ならん然るに共產

黨の此の禁令を見て復た相議するやう政府の氏が送葬に
 旗を繰へすを禁じられたれども未だ幟を立つることを禁ぜざ
 るを以て我黨の旗と見違ふ程なる長大の紅幟を擔ぎ出さ
 んど其の由再び政府に聞えしかば政府の陸軍卿も命じ豫
 じめ共產黨が革命を煽動するの騷擾に備ふる爲め地方鎮
 臺の兵士數聯隊を巴里府内に召集せしめ且つ佛蘭西國に
 て何れの場所を問はず三色の國旗及び分明なる外國旗章
 の外は一切の旗幟を揚ぐるを許さずとの議案を代議元老
 兩議院に提出するに至りぬ斯くて六月一日即ち氏が送葬
 の當日に及びしところ共產黨の政府が既に嚴重なる禁令
 を下したるをも顧みず儘長大なる紅幟を揚げ來つて行列
 に加はらんとせしにぞ警官の奔走周旋其の幟を取つて寸

裂し盡し爲めに小騒擾の外大事の起らずして氏の送葬を
 畢りしハ頗ぶる僥倖なりしと此の日又た愛蘭人民あり同
 人民が常に其の記章を用ふる「シヤムロツク」師の冠を氏ガ
 柩前に寄贈したり元來氏ハ彼の愛蘭借地黨の領袖たる「パ
 ーナル」氏の親友にて夙に英吉利政府が自由を奪ひ權利を
 重んじあがら愛蘭に對してハ却つて壓制刻薄到らざるな
 きと憤激し暗々裏に「パーナル」氏を助け自由の爲めに權利
 の爲めに英吉利政府を抵抗せしめ居たるより愛蘭人民ハ
 氏が訃音を得るに方り宛然父母に別るハの思ひあり然れ
 バこそ此の最も名譽ある草冠を寄贈して以て其の追慕
 の衷情を証せしなれ嗚呼氏ハ實に超群の偉人なり無匹の
 大家あり而して其の曾つて一世の弊害を矯正し自由の眞

理を發揚するや專ばら詩賦小説の力に籍る誰れか詩賦小
 説を目して社會に益なきの一遊戯とするや氏が死去ハ實
 に一千八百八十五年即ち我明治十八年五月二十三日ニシ
 テ八十三歳の高齢なりき氏が終身の著作中最とも文名と
 天下に轟おしたるハ「ノートルダム、ド、パリ」と云へる小説に
 して此の書ハ殆んど歐洲各國の國語に譯出せられ又た「ル、
 ミセレアル」と云へる小説ハ九ヶ國の國語に譯出せられ巴
 里、ブラッセル、倫敦、紐育、マドリット、伯林、聖彼得堡、及びチニ
 リンよ於て同時に出版せられたりと

世界の燈 終

明治十八年十二月一日出版御届
同年 月 出 板

定價金廿八錢

編輯兼
出版人

石川縣士族

嶺 林 太郎

神田區美土代町二
丁目壹番地寄留

發兌元

芝區露月町廿一番地

丁 卯 堂

東 京 圖 館				和 書 門
一 冊	六 七 號 <small>虎</small>	五 加 架	函 類	

25
143

25
143

